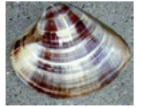




「木曾三川のハマグリ」再生への取り組み



● 3種類のハマグリ

- ・日本で流通している「ハマグリ類」は、年間15,000トン程度多くは輸入の「シナハマグリ」である(図1)。
- ・一方、日本で漁獲されるハマグリは年間1,000トン程度であるが、外洋性の「チョウセンハマグリ」が7割をしめ、内湾性の「ハマグリ」は300トン程度である。

ハマグリ 在来種 内湾性
シナハマグリ 外来種 内湾性
チョウセンハマグリ 在来種 外洋性

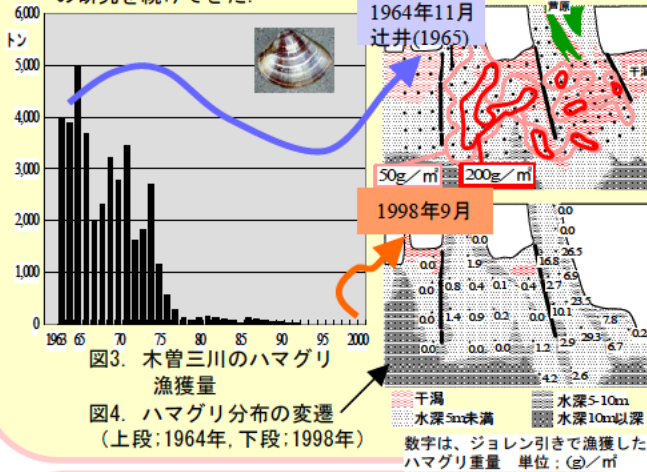
図1. ハマグリのみかま

図2. 木曾三川と漁場
※左から揖斐川、長良川、木曾川の順(揖斐川と長良川は河口で合流)

ハマグリ漁場

● 日本一のハマグリ産地だった木曾三川

- ・木曾三川河口では(図2)、1960年代には年間5,000トンものハマグリが漁獲され日本一の漁獲を誇った。しかし、1985年以降、年間100トン未満に漁獲が急減した(図3、4)。
- ・このため、三重県は赤須賀漁協や桑名市と協力して稚貝生産の研究を続けてきた。



● 研究の概要

- ・餌料となる植物プランクトンの大量投餌及び高水温飼育でハマグリ成熟促進を試みた(図5、図6)。
- ・生産した稚貝を人工の干潟に放流し歩留まりを調べた。

餌料大量投餌 雄貝 産卵用母貝の確保 採卵 成熟促進 放精 高水温飼育

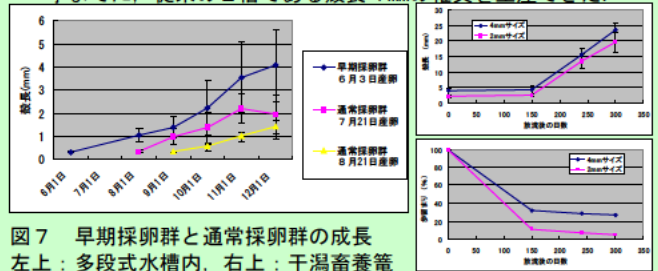
精子 卵 受精 (0.06mm)

稚貝 着底稚貝 (0.2mm) D型幼生 (0.1mm) トロコフォア幼生

図5. 人工採卵までの過程

● 成果の概要

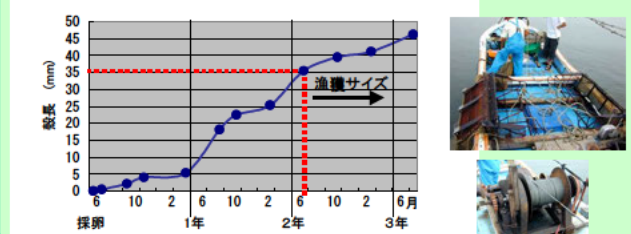
- ・親貝を人工的に成熟させることに成功し、採卵時期を5月下旬に、2ヶ月程度早めることができた(図6、7)。
- ・採卵時期を早め飼育期間を延長した結果、へい死の始まる冬季までに、従来の2倍である殻長4mmの稚貝を生産できた。



- ・今回生産した4mm稚貝および従来から放流していた2mm稚貝を人工干潟に放流し成長・歩留まりを調べた結果、両サイズとも翌年の10月までに20mmに達し、4mm稚貝は2mm稚貝と比較して5倍以上の歩留まりを示した(図8)。
- ・人工干潟上で20mmまで育てた貝に標識をつけ、放流調査を行った結果、成長するにしたがって徐々に深場に移動することがわかった。さらに、殻長20mm以上になると年間の生残が80%以上となることが多く、歩留まりが向上した。



- ・図9には人工産稚貝の成長を示した。漁獲開始サイズで産卵も可能となる殻長35mmには、採卵後約2年で達した。



写真上: 漁具(貝けた網) 下: ウインチ

● ハマグリ資源の増加

- ・厳しい漁獲規制(操業は週2回、30kg/日、操業者25人)や保護区の設定、種苗放流により、近年のハマグリ資源は増加傾向にある(図10)。また貧酸素水塊による斃死も少ない。

